

## 1 教育の責任

私は、保育者養成における表現分野の科目を担当し、学生の「造形遊びにおける表現力及び保育展開技術の向上」を目指している。特別研究においては、課題設定などの問題を発見する力、適切な研究方法の設定、論理的な文章の構成の仕方と資料の分析・考察の仕方などを指導の重点としている。

担当科目の多くは演習、実技形式であり、受講者が自主的に体験に取り組み、体験から得た感覚的に得た学びを言語化とともに振り返り次の学びへと繋げることで深めていく構成となるよう心掛けている。

主な担当科目、課外活動とその概要は以下の通りである。

| 科目及び活動名 (対象学年)             | 概要  |
|----------------------------|---|
| 子どもの生活と造形遊び I<br>(1年)      | 保育士資格を取得するための必修科目である。<br>造形遊びや製作等の体験を通して造形遊びの基礎を学び、造形遊びの専門的な知識と技術、材料や道具の扱いを身につけることを目的とする。                             |
| 子どもの生活と造形遊び II<br>(2年)     | 保育士資格を取得するための必修科目である。<br>造形遊びや製作等の体験を通して、造形遊びの発展、応用を学ぶ。造形遊びを展開するための道具・材料・技法の特徴や留意点、環境構成や準備などの活動を計画する視点を身につけることを目的とする。 |
| 保育と青森 (表現)<br>(1年)         | 保育士資格を取得するための必修科目である。<br>領域「表現」について音楽と造形の2つの視点で説明し、また、実際に体験しながら、保育における表現についての指導法について学んでいく。                            |
| 保育実践と青森 (表現)<br>(1年)       | 保育士資格を取得するための必修科目である。<br>領域「表現」について音楽と造形の2つの視点で説明し、また、実際に体験しながら、保育における表現について学んでいく。                                    |
| 子どもの生活と遊び発表演習 I・II<br>(2年) | 保育士資格を取得するための必修科目である。<br>保育実践に必要な身体・音楽・造形分野に関する表現の基礎を、創作活動や発表を通して身に付ける。<br>この科目で身につけた保育実践に必要な身体・音楽・造形                 |

|  |  |
|--|--|
|  | 分野に関する表現の基礎とし、後期に履修する「子どもの生活と発表遊びⅡ」へと発展・応用させることで、創作活動および発表体験からの学びを深化させる。   |
| 人間と芸術<br>(2年)                              | 芸術（美術、音楽）に関する様々な人物や作品に触れることを通して、芸術に対する視野を広げることを目的とする。  |
| 特別研究<br>(2年)                               | 卒業及び保育士必修科目である。<br>個人または3人以内のメンバーの共同で、保育にかかわる課題からテーマを設定し、様々な調査を経て分析、検討を行う。研究を通し学びを深め論文を作成することを目的とする。   |
| 【課外活動】<br>ビオトーププロジェクトおよびビオトープサークル<br>(全学年) | 本学敷地内のビオトープ（小川や小池、草原などの自然）を教育資源として活用し、学生にとっては保育の専門性としての自然遊びの機会を提供し、附属幼稚園児や地域の子どもにとっては郷土の自然に親しむ機会を提供している。およそ月に一度、附属第一幼稚園との合同保育を行い、その他にも蝉の羽化鑑賞会や自然遊び講座を実施している。 |

## 2 教育の理念

私は、本学の建学の精神である「愛あれ、知恵あれ、真実あれ」の理念を、美術教育と鑑賞活動の形で幼児教育に取り入れることで、より良い教育の形を実現出来ると考えている。

私なりの解釈でいえば、「愛あれ」とは慈愛の精神であり、他者の考えや意見の差異と多様性を認めつつ許容する精神であると考えられる。美術表現とはとどのつまり、他人とどう違うのかという差異の視覚化である。この差異を排除するのではなく、大いに発揮し互いに認め合う事は、美術教育における鑑賞活動の最も基本的な土台ともいべき部分である。

「知恵あれ」とは、ものごとや情報を正しく冷静に識別するために必要な力であり、また情報を統合してさらに活用するための力を示していると考えられる。鑑賞活動の土台ともいべき部分である「先入観に振り回されない客観的な視点」の必要性に繋がる。「愛」では主観的及び精神的な視点から、「知恵」では客観的及び科学的な視点から、これら二つの視点を駆使し作品と対峙せよ、つまり他と交わるべしと解釈できる。この二つの視点のどちらが欠けてしまっても、健全な鑑賞の態度とは言えなくなるであろう。

また、「真実あれ」とは、先述の二つの視点を使いながら絶対的な真理を探究する姿、一人の人間としてどのように他と交わり自分の内面と向き合うのか、そのためにこそ力を使うべしと、美術表現の最終的な理想へ進む姿を示しているように考えられる。

以上のように、建学の精神を自分なりに解釈し一貫性のある授業を学生たちへ提供することで、客観的に自他を分析しその内面にある真の個性に気づくことのできる感性をもつ

た保育者を育成したい。そうした保育者を育成することで地域社会の幼児教育の一助となることを目指す。

### 3 教育の方法

#### ・実践的な学び

学生が造形表現の魅力とその教育的意義を理解するためには、幼児が実際にそうするように体験的に素材や道具に触れ、ともすれば眠りかけている自身の感性を目覚めさせ耕すところから始めなければならない。如何に詳細なテキストの事例紹介よりも実際の体験活動に勝るものは無く、またその体験活動の重要性に学生が気づくことが肝心である。

そのために少しでも多くの素材、道具、環境に触れる体験活動を重視し、さらにその体験活動で感じた学びを定着させるための言語化、記録づくり（ICTの活用）、振り返りを繰り返し行う方法をとっている。「子どもの生活と造形遊びⅠ・Ⅱ」、「保育と青森（表現）」、「保育実践と青森（表現）」、「子どもの生活と遊び発表演習Ⅰ・Ⅱ」で行っている。

#### ・相互鑑賞活動を通した学び

造形活動において、保育者にとって最も重要な力は「作る力」よりも「見る力」であると考えられる。子ども達一人ひとりの表現の違いと魅力に気づき、その表現を受容し適切な言葉かけを行うためには鑑賞活動を通した学びが不可欠である。造形活動を行う授業では基本的に以下のプロセスをセットとして行っている。

- ① 学生が造形活動を行い、結果である作品を作り上げる。
- ② 互いの作品が鑑賞できるように展示する。
- ③ 作品同士を見比べることで自分の表現を振り返り言語化する。また他者の作品についても気になるポイントを言語化する。
- ④ グループワークなどを通し、お互いの言語化のポイントを比較する

以上のプロセスを基本の造形活動とし、主に「子どもの生活と造形遊びⅠ・Ⅱ」で行っている。

#### ・視聴覚教材を通した学び

最新の美術作品や展覧会の様子、保育現場での子どもの遊びへの反応など文字情報や静止画では感じ取りにくい部分を補うために積極的に活用している。また、それと同時に記録媒体活用の可能性と、特に保育の場面において「視聴覚教材は補助的なものであり、実際の体験に勝るものはない」という点を念押ししている。主に「人間と芸術」、「保育と青森（表現）」、「保育実践と青森（表現）」で行っている。

#### 4 教育の成果

##### ・実践を通した学びについて

学生からは学びについて以下のような反応があった。

- ◆ 大人になってから、実際に素材に触ってみることで子どものときの感覚を取り戻せた気がする。
- ◆ 写真やイラストではわからない自然体験の面白さが理解できた。
- ◆ 作ってみることで道具の危険性や、活動中に子どもがつかずくポイントがより理解できた。
- ◆ 指導案に書くべきポイントがより具体的になった。

学びを通して、学生は体験活動の重要性を理解した様子であった。また、造形活動の魅力への理解と学生自身の創作意欲や感性が高まっている様子も見ることができた。

##### ・相互鑑賞活動を通した学びについて

学生からは学びについて以下のような反応があった。

- ◆ 人からリアクションをもらうことが嬉しかった。もっと工夫したくなった。
- ◆ 同級生の意外な工夫やアイデアを見て、新たな一面を見ることができた。
- ◆ ただ飾るだけではない鑑賞の重要性が理解できた。実習などでも積極的に活用したい。
- ◆ 作ることには自信がないので見る力を頑張って伸ばしたいと思った。

学びを通して、鑑賞活動の保育における重要性を理解した様子であった。また、活動を通して学生同士の新たな交流が広がる様子も見ることができた。一方で、他者に自分の作品を見せることができない者、文章化はできても発言ができない者もあり、学びの仕掛けやこちらからのアプローチについて改善の余地があると感じた。

##### ・視聴覚教材を通した学びについて

学生からは学びについて以下のような反応があった。

- ◆ 体験型の新しい美術についてよく理解できた。
- ◆ 音、動きが今までに見たことのないもので感動した。
- ◆ 青森県内にこんなに公立の美術館があるとは思わなかった。郷土の芸術に目を向けるきっかけになった。
- ◆ 子どものリアクションについて繰り返し見直しできるので掘り下げることができた。
- ◆ 手軽なのでこうした視聴覚教材について頼りすぎてしまいそうだが、気を付けたいと思った。あくまで生の体験を第一にしたい。

学びを通して、視聴覚教材のメリットである情報量の多さ手軽さと、デメリットである依存しがちになる点を理解した様子であった。また、これは特に「人間と芸術」の授業のことだが、最新の動画などを通して学生の芸術への新たな興味関心を刺激することが

できた。

今後も一人ひとりの学びの状況を把握しながら、より多くの学生が成果を得られるように創意工夫し授業に臨みたい。